

OMM JAPAN イベントディレクターレポート

開催3年目にしてはじめて好天・快晴となったOMM JAPAN 2016は、例年に比べコースコンディションも良く、今回のイベントの舞台となった北アルプスの麓長野県大町市の里山に広がる美しくも壮大な自然の魅力を感じながら、多くのコンペティターが2日間のレースを堪能したのではないかと思います。

運営チームにとってもこの好天は、安全管理面での運営を例年に比べて楽にしてくれたことは間違いなく、また今回のエリアが大きな遭難や滑落などの危険性が少ないトレイン（地形）であったことももうひとつの安心材料となりました。

と同時に、天候の良し悪しやエリアのトレインにかかわらず、すべてのコンペティターに、“チャレンジング”な2日間を提供することが、私たち運営チームの役割であり、UKで今日まで50年という歴史を繋いでいるTHE OMMの精神であることをあらためて考えさせられる年となりました。

評価・課題・反省

1. 開催地・コース・安全管理

今年の開催エリアは、2000mの稜線地帯と広くつながる高原地帯を使った昨年の孀恋とはまったく異なる標高1000~1200mの広大で美しい森が広がる【里山エリア】を舞台に開催された。例年に比べ、大きな遭難や滑落などの危険性が少ないトレイン（地形）であったものの、多彩なルートチョイスが用意された今回のコースには多くのコンペティターがナビゲーションに苦労しながらも楽しみつつOMMの一筋縄ではいかない難しさを感じてもらえたのでは無いかと思う。またコース上からときおり見える雄大な北アルプスの山々を望むと、この山域がいかに特徴的でありダイナミックな自然を感じられOMMらしいフィールドだと感じてもらえたのではないかと思う。

昨年のイベントでチャレンジング性と安全という2つの相対する要素をこの日本でどのようなバランスで実現していくかが、我々運営チームの大きな課題として浮き彫りとなった。

今年のエリア選定、コースプランニングにはそれらが反映された内容となり、とくに安全管理面では昨年よりも格段に質が向上した。対して課題としてあげられるのはOMMに求められる“壮大なスケール感”と“チャレンジング性”をすべての参加者に対し十分に満たせていたかという点。これは単にトレインやエリア範囲が小さかったという要因だけではなく、その条件の中でもさらにスケール感のあるマウンテンマラソンらしいコースを提供出来たかもしれない。

※なお、この課題についての詳細はコースプランナー小泉のレポートをご覧ください。

また同時にコンペティター自身も、このイベントが“ OWN RISK（自己責任）”の精神の下に開催され、我々運営チームが施行する安全管理も必要最低限にとどまるということを今一度理解してほしいと思う。それがこのイベントの“チャレンジング性”という本質的な魅力を高めることに繋がるのだということもあわせて強調したい。

※詳細については安全管理マネージャー村越のレポートをご覧ください。

2. イベントセンター・オーバーナイトキャンプ

今年もイベントセンターはスキー場施設の協力をいただき、ファシリティの十分に整った会場を用意することが出来た。また飲食・出店ブース会場もすべて室内で行うことが出来たので多くの参加者がレース前の時間をリラックスして過ごせたのではないかと思います。

反省点としては11日（金）の夕食ディナーバイキングで食材の供給が追いつかず多くの方を長時間待たせてしまった上に、結果として十分な内容のメニューを食べることができなかった方も多かったということ。多くの方にご迷惑とご不快な思いをさせてしまったことをこの場を借りてあらためてお詫び申し上げます。また前日祭においては毎年開催地が変わるOMMの特質上、昨年今年のようなファシリティの整ったイベントセンターに限らないことも念頭に入れながら、これまで培ってきた雰囲気大切にしながらも、過剰にサービスを追求しすぎないことも来年以降の課題としたい。

オーバーナイトキャンプはよりワイルドな場所で。という初年度・2年目の課題をさらに追求し実現できたのではないかと思います。また今回から導入した「quiet area」は昨年大会での反省から生まれたアイデアであり多くの参加者からも評価を頂いた。翌日に備えてしっかりとレストに専念したいチームも仲間達とのオーバーナイトキャンプでの夜を楽しみにしているチームも、お互いの考えを尊重しながら、例年よりも少ないストレスで過ごすことが出来たのではないかと思います。

3. マーシャル・スタッフ・ボランティア

今年から各パートを完全に独立したチーム体制にした。それにより各々のチームが効率よく役割を果たすことができたことに加え、余裕のあるチームが他のチームを助けるなどの光景を多く目にした。非常に大きな前進だと感じた。と同時に大きな責任を背負いながら各パートをまとめてくれたチームリーダーの皆さんにあらためて心から感謝したい。

※競技チームの詳細レポートは、別紙テクニカルディレクター田島のレポートをご覧ください。

また今年スタッフ・ボランティアの環境を整えることにも重点を置いた。特にイベント期間中の食事やリラックス出来る休憩場所、また一人に過度な負担がかからないような余裕のある人員確保等、昨年の反省をもとに準備に取り組んだ。上記にあげた11日夜の夕食ではスタッフ・ボランティアにも同様の迷惑を掛けてしまったが全体としては例年の反省が活かされた内容であったと感じる。これらスタッフ・ボランティアの環境改善に率先して取り組んでくれた
Communications Director Jeff Jensenにはこの場を借りて心から感謝を贈りたい。

THANK YOU FOR ALL

OMM JAPAN 2016をともに作り上げてくれたすべての仲間に感謝を贈ります。

TEAM OMM JAPAN
Communications Director Jeff Jensen

渉外 我部乱 (有限会社エクストレモ)
Event HeadQuarter 細谷かこ
Technical Director 田島利佳 (TEAM 阿闍梨)
Course Planner 小泉成行 (公益社団法人日本オリエンテーリング協会)
計測・リザルト 大場隆夫 (公益社団法人日本オリエンテーリング協会)
スタート・フィニッシュ 田畑清士、木村佳司(公益社団法人日本オリエンテーリング協会)
安全管理マネージャー 村越真 (NPO 法人 M-nop)
スタッフ・ボランティアとして参加してくれた皆様

大町市
長野県大町市・観光課職員の皆様
鹿島槍スポーツヴィレッジ スタッフの皆様
中山高原キャンプ場 スタッフの皆様

TEAM OMM
OMM Events Director Stuart Hamilton
Marketing & PR Manager Alistaire MacGregor
Communications Manager 岡こずえ
千代田高史(NOMADICS)
and OMM UK TEAM

ALL Competitors
OMM JAPAN 2016に参加してくれたすべてのコンペティターの皆様

ありがとうございました

OMM JAPAN EventDirector 小峯秀行